

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The relationship between text readability and paraphrase production : A comparison between Chinese/Korean learners of Japanese and native speakers of Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鎌田, 美千子, 仁科, 喜久子, KAMADA, Michiko, NISHINA, Kikuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001850

[研究論文]

文章の難易度とパラフレーズとの関係
—中国人・韓国人日本語学習者と日本語母語話者の比較—
**The relationship between text readability and paraphrase production:
A comparison between Chinese / Korean learners of Japanese
and native speakers of Japanese**

鎌田 美千子・仁科 喜久子
KAMADA, Michiko・NISHINA, Kikuko

要旨

本研究では、難易度が異なる文章をもとに中国人・韓国人日本語学習者によるパラフレーズの使用実態を調査した。その結果、難易度が高い文章、難易度が低い文章双方において、学習者は母語話者に比べ、パラフレーズよりも原文からの抜き出しに有意に偏り、長い抜き出しが目立つこと、また、学習者は、難易度によってパラフレーズと原文からの抜き出しの割合に差がないことが明らかになった。このことから、要約において単に文章を提示しただけでは学習者が原文からの抜き出しにとどまる可能性があるため、パラフレーズを促す工夫や働きかけが必要であることが示唆された。

キーワード：アカデミック・ライティング 第二言語 原文からの抜き出し 量的分析

1. はじめに

パラフレーズは、大学でのレポートや論文の作成に欠かせない言語スキルの一つである。レポートや論文では、他の文献からの間接引用をはじめ、内容の全体的な要約、部分的な要約等、種々の場面でパラフレーズが必要となる。中でも間接引用においては、外からの情報を自分の文章に取り込むといった面での難しさが伴い（二通, 2005）、このスキルの達成にはパラフレーズ能力が大きく影響する。レポートや論文の作成に向けて引用のための論述作法を学んでも、直接引用を過度に繰り返したり、数行にわたる長い直接引用に頼ったりする例が見受けられる。キーワードとなる語句は一般的にパラフレーズする必要性が低いとしても、内容を自らの表現に取り込むためには、適切にパラフレーズできる能力が必要である。

パラフレーズに関して、留学生向けの日本語教材においては、話しことばから書きことばに書き換える練習や動詞句を名詞句にする練習等が示されている（アカデミック・ジャパニーズ研究会, 2002; 二通・佐藤, 2003他）。だが、要約や引用のように内容をまとめる際には、

さまざまな種類のパラフレーズが関連し、このような練習だけでは十分とは言えない。また、こうした局所的な練習はできるようなっても、一貫性のある談話を自ら構成する場合には、語彙及び統語的側面等が絡み、十分に達成できないことが多い。したがって、留学生が外からの情報を取り込んで自ら書き進めることが実際にできるようになるための教育学習方法の検討が必要である。パラフレーズ運用に関する諸側面を多面的に究明することで、その方策の解明を求めることができる。

一方で、パラフレーズに関する研究として、これまでテキスト言語学における研究（ベケシュ、1987他）や自然言語処理における研究（乾・藤田、2004他）による蓄積はあるものの、日本語学習者のパラフレーズ使用について検証した研究は少なく、第二言語運用に内在するパラフレーズの諸相については未だ解明されていない点が多い。また、実態に即した効果的な教授法や教材に関する議論もほとんど行われていない。

そこで、本研究では、日本語学習者の中でも留学生が目指すべきパラフレーズ能力として日本人大学生程度の能力を想定し、実際の留学生のパラフレーズ使用が日本人大学生に比べてどのような状況にあるのか、談話（discourse）レベルでのパラフレーズ使用の実態を捉え、得られた結果より、その教授法のあり方を検討する。

2. 先行研究

2.1 要約・引用時のパラフレーズ使用に関する研究

文章を読んで内容を簡潔にまとめる際には、必要に応じて別の表現に言い換えたり、内容を上位概念に置き換えたりする。認知心理学における文章産出過程研究では、熟達した書き手は要約時にパラフレーズをはじめ種々の方法でまとめるのに対し、未熟な書き手は原文からの抜き出しに偏るという特徴が指摘されている（Brown and Day, 1983）。これは、英語母語話者を対象にしたものであるが、日本語による要約・引用を研究対象にした以下の研究でも、パラフレーズに関して次のような知見が得られている。

小宮（1994）は、韓国人学習者の要約文と日本語母語話者の要約文の比較を通して、学習者の場合、原文の理解が要約に影響し、パラフレーズの達成が難しいことを指摘している。八若（1999）は、中国語または韓国語を母語とする上級学習者、中級学習者、日本語母語話者の引用方法を比較分析した結果から、第二言語レベルの向上にしたがって、パラフレーズ²の使用が増えることを明らかにしている。また同様に、八若（2001）は、韓国人学習者を対象に行なった調査の結果から、読解能力下位群は上位群に比べて原文からの抜き出し³を有意に多く使用し、パラフレーズの割合が低いことを指摘し、パラフレーズ使用と読解能力との関連を明らかにしている。

いずれも日本語学習者のパラフレーズ使用の特徴を学習者側の要因から示したものであるが、教授法や教材を検討する上では、こうした知見に加えて、提示する文章に関する要因にも着目する必要がある。上述の小宮では文章構造の違いからも考察がなされている

ものの、文章の難易度の観点から日本語学習者のパラフレーズ使用の特徴を検証した研究は、管見の限り、ない。先行研究が示す、パラフレーズの割合が低いという学習者の特徴が、文章の難易度によって差異があるかどうかを明らかにすることは、日本語学習者の言語運用の特色を解明する上でも、また有効な教育学習方法について検討する上でも重要である。

2.2 第二言語教育におけるパラフレーズに関する研究

教育的側面からパラフレーズについて論じたものには、伊藤（2007）、佐野（2007）がある。

伊藤は、日本語教育全般にわたる広い枠組みの中で、パラフレーズの二つの方向性と多様性に関して考察している。パラフレーズには、当該表現からより難しい表現へ言い換える「上への言い換え」と、より易しい表現に言い換える「下への言い換え」の二つの方向性があることを示し、日本語能力試験出題基準（以下、出題基準リスト）を参照しつつ、言語形式と意味的・形態的特徴との関連から論じている。しかし、主として学習項目としての語句の検討にとどまっており、本研究で対象とする、内容のまとめといった観点からの分析については、触れられていない。

佐野は、英語教育の立場から、オーストラリアの大学で一般学生を対象にした学術論文指導の一環として行われている「学術的表現への言い換え」に関する授業実践を取り上げ、その理論的枠組みと教育への応用例を示している。そして、学術的な表現と日常的な表現の違いを「単に構造的に捉えるだけではなく、状況や意味との関連付けを体系的に把握すること（p.61）」が必要だと述べている。こうした学術的表現への言い換え教育は、日本の大学におけるアカデミック・ライティング教育においても重要な役割を果たすことが期待できる。一方、日本の大学で学ぶ留学生への日本語教育を考える場合には、日本人学生と共通する問題と、第二言語としての日本語運用において生じる留学生特有の問題とを把握しておく必要がある。本研究では、日本の大学で留学生に日本語教育を行う立場から、後者について取り上げる。

2.3 文章及び文の難易度推定に関する研究

自然言語処理の分野を中心に、文章や文の難易度推定に関する研究が進められている。日本語に関しては、主に次のようなものがある。川村（1998）は、出題基準リストに基づき、文章中の語のレベル別含有率から難易度を提示するシステムを開発している。Sato et al.（2008）は、小・中・高・大学の教科書コーパスに基づき、漢字の出現確率から難易度を提示するシステムを開発している。文章の難易度には、これら語や文字以外の要因が関係していることが考えられるが、現在のところ、筆者らが知る限り、日本語の文章の難易度に関わる種々の要因を総合的に反映させた難易度推定ツールは、公開されていない。

文の難易度推定に関しては、吉橋他（2007）が日本語作文支援システムにおける例文表示ツールを開発するにあたり、語彙、文法、構造のそれぞれの面から検討している。語彙

及び文法に関しては、上述した川村と同じく出題基準リストに基づき推定している。構造に関しては、主として連体修飾節内の用言の個数から推定している⁵。

文章の難しさには複数の要因が関係しており、難易度の検討にあたっては何らかの基準が必要である。本研究では、川村及び吉橋他の方法を参考に文章の難易度を推定し、パラフレーズの使用実態を検討する。

3. 研究の目的

本研究では、パラフレーズを言語運用の積極的な方略として捉え、その教育学習方法を検討するための基礎研究の一つとして、参照する文章の難易度に焦点を当てる。パラフレーズと原文からの抜き出しに着目し、日本語学習者、中でも中国人・韓国人学習者がどのように内容をまとめているかを量的な側面から明らかにすることを目的とする。中国人・韓国人学習者を対象にする理由は、日本語学習者のパラフレーズ使用に関する先行研究で得られた知見が中国人・韓国人学習者を対象にしたものであること、また日本国内の留学生数の中で中国人・韓国人学習者が高い割合を占めることにある。具体的には、中国人・韓国人留学生と日本人大学生の間で、パラフレーズと原文からの抜き出しの割合に相違が見られるかどうか、難易度が異なる文章それぞれにおいて検証する。また、難易度の違いによって、パラフレーズと原文からの抜き出しの割合に相違があるかどうかに関しても明らかにする。合わせて、中国人学習者と韓国人学習者の間の差異についても検討する。なお、個々のパラフレーズの質的な分析に関しては、例えば原文と産出パラフレーズとの関係、内容の上位概念への置き換え、品詞の転換等、多岐にわたるため、本稿では扱わないこととし、別の機会に述べることにする。

本研究によって、文章の難易度とパラフレーズとの関係が解明されることにより、原文からの抜き出しのみに頼らずに内容をまとめる力を養成する方法を検討する上での知見が得られると考える。

4. 研究方法

調査対象は、日本の地方国立大学で学ぶ学部留学生（日本語能力試験1級相当レベル）31名（以下、学習者群）及び日本人大学2年生20名（以下、母語話者群）である。学習者群の母語は、中国語20名、韓国語11名である。学習者群の日本語学習期間は平均45.5ヶ月である。以下では、「留学生」を「学習者」、「日本人大学生」を「母語話者」に用語を統一して述べていく。

調査に使用した課題文は、難易度が高い課題文A（221字）、難易度が低い課題文B（270字）の二種類である。課題文Aは、『環境白書（平成18年度版）』（環境省、2006：p.5）から抜粋し、適当な長さに調整するために一部書き改めたもので、高齢化社会における単身世帯のエネルギー消費に関する分析結果について述べられている。課題文Bは、日本博物館協会

ホームページ「やまびこネット」(<http://www.j-muse.or.jp/joyful/science/sa015.html>) から抜粋し、適当な長さに調整するために一部書き改めたもので、使い捨てカイロのしくみについて述べられている。調査に用いる課題文の決定にあたっては、砂川（2005）を参考に、主題が最後まで一貫している談話展開のものを選定した⁶。以下、課題文Aの一部を図1-1に、課題文Bの一部を図1-2に示す。

光熱・水道費について、比較的しやすい単身世帯について見ると、年齢が高くなるにしたがって高くなっています。これは、高齢化による体温調節機能の低下から、暖房機器等を多用する傾向にあること、定年退職に伴って在宅時間が長くなり、家電製品等（以下、省略）

[図1-1：課題文Aの一部]

使い捨てカイロには、鉄粉と水、塩類、活性炭、保水材などが入っています。袋の中で鉄粉と水との化学反応（鉄が急速にさびる）により、熱が出て暖かくなります。このとき働きをよくするために、いろいろな工夫がされています。できるだけ早く暖かく（以下、省略）

[図1-2：課題文Bの一部]

二つの課題文の難易度比較にあたっては、以下の通り、語彙、文法、構造のそれぞれの面から検討した。語彙の難易度に関しては、川村の難易度推定ツールに基づき、文章中の語のレベル別含有率からそれぞれの難易度を推定した。文法面に関しては、吉橋他に基づき、機能表現の数と出題基準リストに該当する級から判断した。構造面に関しては、吉橋他を参考に連体修飾節数及び各連体修飾節内の用言数と、文の長さによる複雑さを検討するために一文あたりの平均文節数から比較した。その結果、いずれにおいても課題文Aは課題文Bよりも高い値を示した。詳細は、以下の通りである。まず、語彙に関しては、出題基準リストのレベル別含有率に基づき、課題文Aの方が課題文Bよりも難しいと判断される⁷。文法に関しては、表1-1の通り、課題文Aの方が機能表現の延べ数・異なり数ともに値が高く、さらに、より高いレベルのものが使用されている。構造に関しては、表1-2の通り、連体修飾節数及び各連体修飾節内の用言数、一文あたりの平均文節数のいずれにおいても課題文Aが課題文Bよりも高い数値を示している。これらの点から、課題文Aは課題文Bよりも難易度が高い文章であると判断した⁸。

[表1-1：課題文Aと課題文Bの比較（文法面）]

	機能表現数及びレベル（級）	
	延べ数	異なり数
課題文A	9 (2級:7, 3級:2)	8 (2級:6, 3級:2)
課題文B	7 (2級:3, 3級:4)	3 (2級:2, 3級:1)

[表1-2：課題文Aと課題文Bの比較（構造面）]

	連体修飾節数及び各節内の用言数	一文あたりの平均文節数
課題文A	8 2用言:3, 1用言:5	14.3
課題文B	1 2用言:1	8.1

手続きとして、調査者立会いのもと、まず、課題文Aを読み、その内容をゼミや演習での発表の一部に入れたらどのようなスライド原稿(PowerPoint等)を作成するかを考え、筆記具で解答用紙の枠(縦9.5cm×横13.5cm)の中に書き込むことを求めた。次に、課題文Bを読み、同様の方法でその内容をまとめることを求めた。このように発表資料の一部としての引用を求めた理由は、第一に、発表のためにまとめられたものは、通常の記事よりも簡潔さが求められ、パラフレーズの必要性が高まると判断したこととあり、第二に、単なるメモとしてではなく、読み手への配慮及び書く目的を意識させることにある。解答用紙回収後、学習者群には、内容理解を問う正誤問題に答えることを求め、正答率が7割以上のものを分析対象にすることとし、解答の全てがその基準を満たしていることを確認した。課題遂行にあたって時間制限は特に設けなかったが、所要時間は15～30分程度であった。辞書の使用は認めなかった。また、両課題文の難易度に関しては、一切知らせなかった。以下、課題文Aを「難易度が高い文章(A)」、課題文Bを「難易度が低い文章(B)」として述べていく。

分析にあたっては、原文を残存認定単位(ベケシュ, 1989)に分けて、産出された箇条書きの該当箇所がパラフレーズされているか、あるいは原文からの抜き出しなのかで、二つに分類し、計量した。残存認定単位とは、要約研究で原文のどの部分に取り出されているのかを分析するために用いられる単位である。単語や文節を分析の単位にした場合には、単位が小さすぎてしまい、原文のどれに当たるかの判断が困難になることから、また、文を分析の単位にした場合には、単位が大きすぎてしまい、残存の認定が困難になることから、節を主な単位としている(p.22)。残存認定単位の区分基準を、ベケシュに基づき、表2に示す。また、残存認定単位に区分した原文の一部を以下に示す。

【表2：残存認定単位の区分基準(ベケシュ, 1989に基づき作成)】

単位	区分基準
主節	用言・助動詞の基本(終止)形の後
従属節	連用中止形、接続助詞の後
連体修飾節	内の関係では、底の名詞の後/外の関係では、底の名詞の前/形式名詞は、底の名詞の後
引用表現	～ト、～ヨウニを伴う引用節では引用表現の前
主題的成分	～ハ、～モを伴う主題的成分が二つ以上の節に係る場合、主題的成分の後
文副詞	二つ以上の節に係る場合、文副詞の後
状況的成分(空間・時間)	二つ以上の節に係る場合、状況的成分の後
関係的成分	接続詞の後
その他	挿入句の後

残存認定単位の区分例：

光熱・水道費について、/比較のしやすい/単身世帯について/見ると、/年齢が高くなるにしたがって/高くなっています。/これは、/高齢化による(以下、省略)

文章要約と、本研究で分析対象とする箇条書きが「内容をまとめる」という点において共通していることから、この単位による分析を行うこととした。こうして得られた分析資料をもとに、パラフレーズの産出と原文からの抜き出しについて比較検討した。

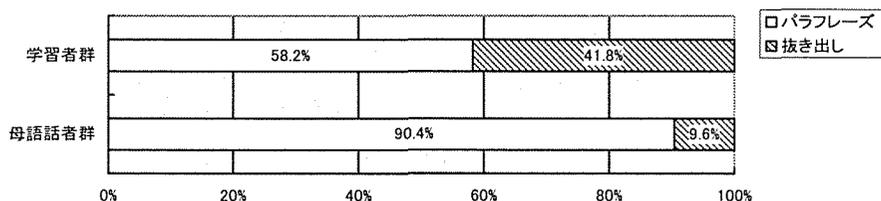
以下、分析の結果について、1) 学習者と母語話者における比較、2) 難易度が異なる文章における比較、3) 中国人学習者と韓国人学習者における比較の順で述べる。

5. 結果と考察

5.1 学習者と母語話者における比較

5.1.1 難易度が高い文章からのパラフレーズ

難易度が高い文章 (A) について、箇条書きに取り上げられた残存認定単位数を計量した結果、学習者群が237、母語話者群が156であった。これらのパラフレーズ数と原文からの抜き出し数を計量し、パラフレーズと抜き出しの割合を調べた。その結果を図2に示す。母語話者群では、全体の約9割がパラフレーズであるのに対し、学習者群のパラフレーズは約6割にとどまり、学習者群で原文からの抜き出しの割合が相対的に高い。このことについて、学習者群と母語話者群の間で χ^2 二乗検定を行ったところ、1%水準での有意差が認められた ($\chi^2(1) = 47.23, p < .01$)。難易度が高い文章 (A) では、両者で内容の取り上げ方が異なり、学習者群では、母語話者群に比べ原文からの抜き出しの割合が高いことがわかった。



[図2：難易度が高い文章 (A) におけるパラフレーズと抜き出しの割合 (学習者群及び母語話者群)]

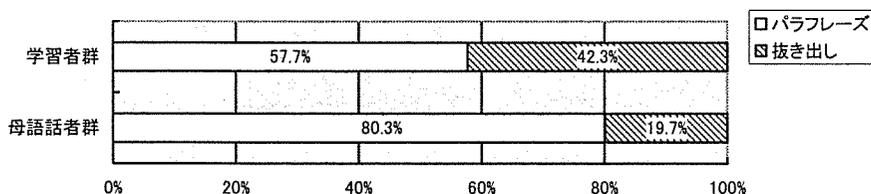
次に、上で明らかになった、原文からの抜き出し傾向に関して、抜き出しの長さに着目し、学習者群と母語話者群を比較した。長い抜き出しが多用されるということは、原文からの表現の取り込みの度合いが高いことを意味する。そこで、残存認定単位3単位以上連続する抜き出しを「長い抜き出し」と見なし、それらが原文からの抜き出しの残存認定単位数全体に占める割合を調べた。結果を表3に示す。母語話者群では長い抜き出しが全く用いられていない一方で、学習者群では3単位以上連続するものが約半数を占めている。母語話者群における抜き出しは、全てが残存認定単位1単位以内の短いものである。母語話者が原文のごく短い一部を活用して内容をまとめているのに対し、学習者はより長い抜き出しでまとめていることが読み取れる。

[表3：難易度が高い文章（A）における長い抜き出しの割合（学習者群及び母語話者群）]

	3単位以上連続する抜き出し数	全抜き出し数	割合
学習者群	49	99	49.5%
母語話者群	0	15	0.0%

5.1.2 難易度が低い文章からのパラフレーズ

難易度が低い文章（B）について、箇条書きに取り上げられた残存認定単位数を計量した結果、学習者群が310、母語話者群が238であった。これらのパラフレーズ数と原文からの抜き出し数を計量し、パラフレーズと抜き出しの割合を調べた。その結果を図3に示す。母語話者群は、パラフレーズが全体の約8割を占めるのに対し、学習者群では約6割にとどまる。前述の難易度が高い文章（A）の結果と同じく、原文からの抜き出しの割合が相対的に高い。このことについて、学習者群と母語話者群の間で χ^2 検定を行ったところ、1%水準での有意差が認められた ($\chi^2(1) = 31.11, p < .01$)。難易度が高い文章（A）の内容をまとめる場合と同様に、難易度が低い文章（B）でも母語話者群に比べて、学習者群では原文からの抜き出しの割合が高かった。



[図3：難易度が低い文章（B）におけるパラフレーズと抜き出しの割合（学習者群及び母語話者群）]

次に、各群の原文からの抜き出しの長さに着目し、残存認定単位3単位以上連続する抜き出しが原文からの抜き出しの残存認定単位数全体に占める割合を調べた。結果は表4の通りである。母語話者群における長い抜き出しの割合は、ごくわずかにとどまっている。これに対して、学習者群では、難易度が高い文章（A）ほどではないが、まとまった数値を示し、母語話者群に比べて長い抜き出しを行っていることがわかる。学習者群で長い抜き出しの割合が難易度が高い文章（A）に比べて低い理由は、原文における一文の長さが短いことによるものと思われる。

[表4：難易度が高くない文章 (B) における長い抜き出しの割合 (学習者群及び母語話者群)]

	3単位以上連続する抜き出し数	全抜き出し数	割合
学習者群	30	131	22.9%
母語話者群	3	47	6.4%

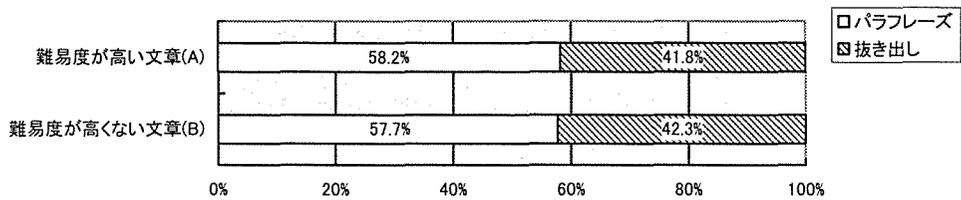
以上、難易度が高い文章と難易度が高くない文章のどちらにおいても学習者は母語話者に比べてパラフレーズの割合が低く、原文からの抜き出しの割合が高いことが明らかになり、従来の研究を支持する結果となった。また、どちらの文章においても母語話者の抜き出しは比較的短いものであるのに対し、学習者の抜き出しは長いものが目立ち、内容の抽出の仕方が両者で異なることが明らかになった。このような学習者の傾向は、読み取った内容をまとめる上での意味の再構築が十分ではないことの現われと考えられ、こうした母語話者との違いは注目すべき点である。

5.2 難易度が異なる文章における比較

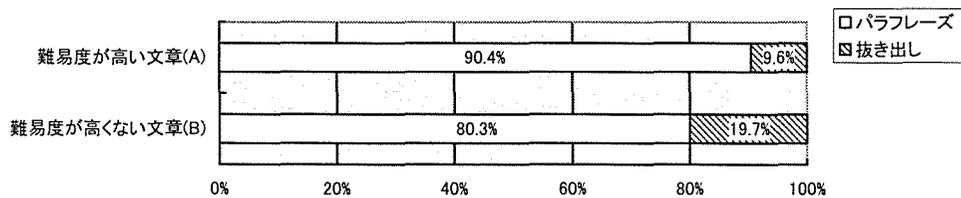
上述した、学習者による内容のまとめが抜き出しに偏るという特徴は、母語話者との比較における結果であったが、本節では、難易度の違いによって、学習者のパラフレーズと原文からの抜き出しの割合に違いがあるのかどうかについて比較検討する。

まず、難易度が高い文章 (A) と難易度が高くない文章 (B) における学習者群のパラフレーズと原文からの抜き出しの割合を図4に示す。図4を見ると、難易度が高い文章 (A) と難易度が高くない文章 (B) との間に目立った違いは見られない。 χ^2 二乗検定の結果、難易度が高い文章 (A) と難易度が高くない文章 (B) の間で有意な差はなかった ($\chi^2(1) = 0.68, n.s.$)。したがって、学習者の場合には、難易度による差異がないことが確認された。

難易度による有意差がないという結果は、学習者群だけの特徴なのか、それとも母語話者にも共通する特徴なのかを確認するために、次に、母語話者群についても同様に比較した。難易度が高い文章 (A) と難易度が高くない文章 (B) における母語話者群のパラフレーズと原文からの抜き出しの割合を図5に示す。図5を見ると、難易度が高い文章 (A) の方がややパラフレーズの割合が高い。難易度が高い文章 (A) と難易度が高くない文章 (B) の間で χ^2 二乗検定を行ったところ、1%水準での有意差が認められた ($\chi^2(1) = 7.30, p < .01$)。母語話者群では難易度が高くない文章 (B) よりも難易度が高い文章 (A) でパラフレーズの割合が有意に高いことが判明し、難易度による差がないのは学習者群のみであることを示唆する結果となった。



[図4：難易度が異なる文章からのパラフレーズと抜き出しの割合（学習者群）]



[図5：難易度が異なる文章からのパラフレーズと抜き出しの割合（母語話者群）]

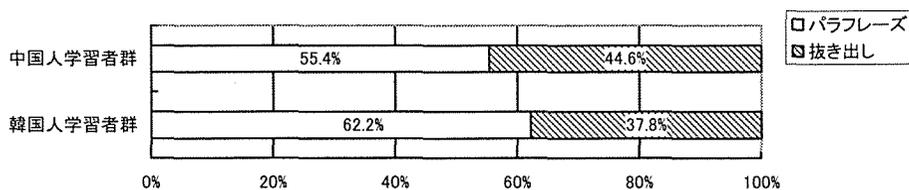
この結果には、次のことが関係していると考えられる。個々のパラフレーズを見てみると、原文中の1級語彙及び出題基準リスト外の語彙（以下、級外語彙）、すなわち難易度が高い語は、より易しいレベル（2～4級）の語へパラフレーズされているわけではなく、抜き出しによりそのまま残されている。このことは、母語話者群・学習者群どちらの場合においても、またどちらの文章の場合においても共通している。しかしながら、母語話者群では、抜き出された1級語彙及び級外語彙に関連した前後の表現が、その難易度の高さに合わせるように、他の語や機能表現等にパラフレーズされている。そのため、1級語彙及び級外語彙が占める割合が高い、難易度が高い文章（A）で、こうした語彙面及び文法面からの調整が相対的に多くなり、このことが母語話者群の結果に影響したと推察される。これに対して、学習者群の内容のまとめでは、どちらの文章においても全般的に長い抜き出しが用いられており、母語話者のような1級語彙及び級外語彙に関連した全体的な調整はわずかしか生じていない。そのため、学習者群ではパラフレーズの使用に難易度による相違が現れなかったと考えられる。

5.3 中国人学習者と韓国人学習者における比較

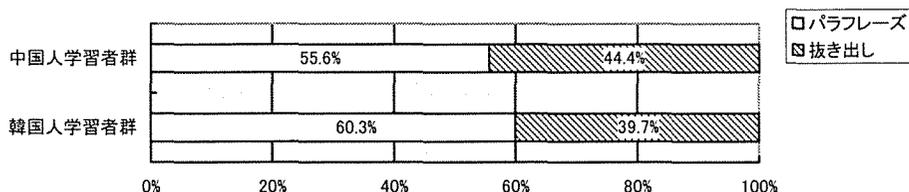
上で明らかになった、学習者における原文からの抜き出し傾向に関して、中国人学習者と韓国人学習者で相違があるかどうかを確認するために、以下では、学習者群を中国人学習者群と韓国人学習者群の二群に分けて検討する。両者の比較にあたって、中国人学習者群と韓国人学習者群のそれぞれの日本語能力に差がないことを、SPOT（Simple Performance-

Oriented Test)⁹ ver.2により、以下の通り確認した。各群の平均点は、中国人学習者群58.4点（標準偏差4.4）、韓国人学習者群60.5点（標準偏差4.0）であった（65点満点）。*t*検定では両学習者群間に有意差はなかった（*t* (29) =1.28, *n.s.*）。以下、パラフレーズと原文からの抜き出しの割合、長い抜き出しの使用の順で述べる。

難易度が高い文章（A）における各群のパラフレーズと原文からの抜き出しの割合は、図6の通りである。中国人学習者群では、韓国人学習者群に比べ、パラフレーズの割合がやや低いようであるが、 χ^2 二乗検定の結果、中国人学習者と韓国人学習者群の間で有意な差はなかった（ χ^2 (1) =1.10, *n.s.*）。次に、難易度が高くない文章（B）について比較する。各群のパラフレーズと原文からの抜き出しの割合は、図7の通りである。中国人学習者群も韓国人学習者群もほぼ同様の割合を示し、目立った相違は見られない。 χ^2 二乗検定の結果、中国人学習者と韓国人学習者群の間で有意な差はなかった（ χ^2 (1) =0.68, *n.s.*）。以上の結果をまとめると、パラフレーズと抜き出しの割合に関して、中国人学習者と韓国人学習者群の間で有意な差がなく、両者における相違は確認されなかった。



[図6：難易度が高い文章（A）におけるパラフレーズと抜き出しの割合（中国人学習者群及び韓国人学習者群）]



[図7：難易度が高くない文章（B）におけるパラフレーズと抜き出しの割合（中国人学習者群及び韓国人学習者群）]

次に、長い抜き出しの使用について見てみると、難易度が高い文章（A）では、表5の通り、中国人学習者群で約6割、韓国人学習者群で約4割に及び、どちらでも一定の割合で長い抜き出しが行われている。一方、難易度が高くない文章（B）では、表6の通り、韓国人学習者群ではごくわずかにとどまっているのに対し、中国人学習者群では3割を超えており、その差が著しい。つまり、韓国人学習者は文章の難易度によって異なる傾向を示しているのに対し、中国人学習者はいずれの文章においてもまとまった数の長い抜き出しを行っている。

このように、中国人学習者が長い抜き出しを行う背景には、語彙や構文を十分に使いこなせないことがあると推察されるが、漢語に関する知識や読解ストラテジー¹⁰がどのように影響しているのかといった側面からの検証が必要である。

[表5：難易度が高い文章(A)における長い抜き出しの割合(中国人学習者群及び韓国学習者群)]

	3単位以上連続する抜き出し数	全抜き出し数	割合
中国人学習者群	35	62	56.5%
韓国学習者群	14	37	37.8%

[表6：難易度が低い文章(B)における長い抜き出しの割合(中国人学習者群及び韓国学習者群)]

	3単位以上連続する抜き出し数	全抜き出し数	割合
中国人学習者群	27	75	36.0%
韓国学習者群	3	56	5.4%

6. 日本語教育への示唆

本研究では、中国人・韓国学習者の要約や引用において、パラフレーズが少なく原文からの抜き出しに偏ることの原因の一つに文章の難易度が関係しているのではないかと考え、その検証を試みた。その結果、第一に、難易度が高い文章と難易度が低い文章のどちらの場合でも、学習者は母語話者に比べ原文からの抜き出しに偏り、長い抜き出しが相対的に多いこと、第二に、母語話者の場合、難易度が高い文章においてパラフレーズの割合が高いのに対して、学習者の場合、文章の難易度による差異がないことが明らかになった。加えて、どちらの文章の場合でも、中国人学習者と韓国学習者の間で、パラフレーズと原文からの抜き出しの割合に有意な差は確認されなかった。これらの結果から、パラフレーズの割合の低さは、難易度に関わらず、中国人・韓国学習者に共通する問題であるという結論を得た。

こうした背景には、第二言語運用上の難しさが関係していると推察され、日本語指導において積極的に取り上げていく必要があると思われる。学習者の内容のまとめにおいて文章の難易度にかかわらずパラフレーズの割合が有意に低いという結果をふまえると、難しい文章であれ易しい文章であれ、単に文章を提示するだけでは、原文からの抜き出しに頼る状況にとどまらせてしまう可能性がある。とりわけ、学術場面における高度で複雑な日本語運用においては、その傾向が一層強まることが予想されることから、パラフレーズを促す工夫や教師からの働きかけが不可欠である。学習者は、母語話者にはほとんど見られなかった長い抜き出しを行っており、読み取った内容をまとめる上での意味の再構築が十分ではな

い傾向が観察された。この結果に基づき、指導にあたっては次の点に留意する必要があると考える。第一に、該当箇所が全体の中でどのような位置づけにあるのか、その状況や意味をよく認識させることである。そのことにより、内容の取り込みがより主体的に意識化され、パラフレーズにつながると思われる。第二に、単なる語句の置き換え練習にとどまらず、広い範囲から内容を凝縮してまとめる際にも適切にパラフレーズできるような運用力をつける練習を行うことである。5.2で考察したように、母語話者の内容のまとめでは、難易度が高い語に関連してパラフレーズが生じていたことをふまえると、難易度が高い語の使用に付随して必要となる表現、例えば共起語や機能表現などの使用が鍵になると思われる。

7. 今後の課題

本研究では、文章の難易度との関連から、中国人・韓国人学習者のパラフレーズ使用の一端を明らかにし、教育学習方法を検討するにあたって留意すべき点について述べた。学習者と母語話者ではパラフレーズの使用傾向が量的に異なることに加え、原文からの抜き出しの長さの面でも異なるという結果は、難易度が異なる文章2編に基づくものであり、今後は更に複数の文章を対象に総体的な解明を目指す必要がある。また、今回の枠組みだけでは質的な相違に関して十分に検討できなかった。今後、語彙意味論及び対照言語学的見地から、原文における表現と産出パラフレーズとの関係や、原文と産出パラフレーズにおける言語形式の違い等を究明しなければならない。特に中国人学習者に顕著だった長い抜き出しについては、類義語や上位語に関する語彙知識や、再構築した意味を言語化するにあたっての統語的知識等との関連からの検証が必要である。

文章の難易度推定に関しては、現在も方法論やその妥当性の検証といった諸側面から研究されているところで、統一した見解が得られていない。そのため、本稿で示した方法は、ある種、暫定的であることを認めざるを得ない。現段階ではあまり検討が進んでいない内容面や構成面における難易度をどのように測るかといった問題も含めて今後の課題としたい。

今後は、さらに多角的な側面から日本語学習者のパラフレーズの特徴を明らかにし、第二言語運用におけるパラフレーズに関わる認知過程を解明するとともに、効果的な教授法の提案につなげていきたい。

謝辞

調査にあたっては、多くの方々にご協力いただきました。厚くお礼申し上げます。また、本稿をまとめるにあたり、査読者の方々から大変有益なご助言をいただきました。深く感謝申し上げます。本研究は、平成19-21年度文部科学省科学研究費基盤研究(C)「日本語学習者の文章産出におけるパラフレーズに関する研究」(課題番号:19520442 研究代表者:鎌田美千子)の成果の一部であることを記し、謝意を表します。

注

- 1 ある言語表現の意味内容を他の言語表現で表すことを意味する用語に、「パラフレーズ」、「言い換え」、「換言」、「書き換え」等があるが、本稿では総じて「パラフレーズ」という用語を使用することとする。
- 2 八若（1999）では、用語として「言いかえ」を用いている。
- 3 八若（2001）では、用語として「コピー」を用いている。
- 4 伊藤（2007）では、用語として「言い換え」を用いている。
- 5 他に「離れた文節に係る文節」及び「多段に渡る修飾」に関しても検討しているが、計算法や妥当性の面で課題が残されており、本稿では扱わないこととした。
- 6 砂川（2005）は、談話展開の構造を、主題が最後まで維持される「課題持続型」と、直前に述べられた情報をふまえて次々に新しい主題が設定される「課題推移型」の二つに大別し、それぞれの文章をもとにした要約とタイトル付けに関して日本人母語話者を対象に調査した。その結果、「課題推移型」の展開では書き手によってさまざまな観点から内容がまとめられているのに対し、「課題持続型」の展開では、ほぼ同じ観点から類似したまとめがなされていることを指摘している。本研究では分析上、書き手による観点が統一されていることが望ましいと考え、「課題持続型」の文章を用いることとした。
- 7 川村（1998）による難易度推定ツール (<http://language.tiu.ac.jp/> 検索日:2006年10月15日)によると、課題文Aは「難しい」、課題文Bは「ふつう」と推定された。本研究において「易しい」文章ではなく「ふつう」の文章を用いることにしたのは、課題文の選定にあたって学部留学生が実際に大学で接する文章であることを前提とし、そのレベルに達しない易しすぎる課題文は使用しないことにしたからである。
- 8 両課題文における内容面の難しさについては、手続きとして、各文章の内容理解を問う問題で一定水準の解答が得られていることから、二つの課題文の内容における難易度には大きな違いはないものとした。
- 9 小林他（1996）によると、SPOTは、「自然な速度で読み上げられる1問1答を即時的に処理することを要求する（p.204）」テストであり、「統合的な日本語能力を反映したテスト（p.204）」であるとされている。
- 10 重松他（1994）では、中国人学習者は日本語の文章を読む際に漢字に頼った読み方をすることが指摘されている。

参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編（2002）『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』アルク。
- アンドレイ・ベケシュ（1987）『テキストとシンタクス—日本語におけるコピーションの実験的研究』くろしお出版。

- アンドレイ・ベケシュ (1989) 「残存認定単位の規定と出現傾向」佐久間まゆみ編『文章構造と要約文の諸相』18-34, くろしお出版.
- 伊藤健人 (2007) 「日本語教育における言い換え一二つの方向性と多様性—」『日本語学』26巻13号, 14-26, 明治書院.
- 乾健太郎・藤田篤 (2004) 「言い換え技術に関する研究動向」『自然言語処理』vol.11, No.5, 151-198, 言語処理学会.
- 川村よし子 (1998) 「語彙チェッカーを用いた読解テキストの分析」『講座日本語教育』34, 1-22, 早稲田大学日本語研究教育センター.
- 環境省 (2006) 『環境白書 (平成18年版)』ぎょうせい.
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史 (1996) 「日本語能力の新しい測定法 [SPOT]」『世界の日本語教育』6, 201-218, 国際交流基金日本語国際センター.
- 小宮千鶴子 (1994) 「韓国人学習者の要約作文の問題点」佐久間まゆみ編『要約文の表現類型—日本語教育と国語教育のために—』193-200, ひつじ書房.
- 佐野大樹 (2007) 「学術的表現への言い換え—教育現場での選択体系言語理論—」『日本語学』26巻13号, 60-71, 明治書院.
- 重松淳・鴻巣努・福田忠彦 (1994) 「アイカメラによるnon-nativeの『読み』に関する実証的研究 (第2報)」『日本語教育学会秋季大会予稿集』92-95, 日本語教育学会.
- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—』くろしお出版.
- 二通信子 (2005) 「アカデミック・ライティング」国立国語研究所編『日本語教育年鑑2005年版』29-41, くろしお出版.
- 二通信子・佐藤不二子 (2003) 『改訂版留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク.
- 八若壽美子 (1999) 「日本語母語話者と日本語学習者の作文における読解材料からの情報使用について」『言語文化と日本語教育』18, 12-24, お茶の水女子大学日本言語文化学会.
- 八若壽美子 (2001) 「韓国人日本語学習者の作文における読解材料からの情報使用—読解能力との関係から—」『世界の日本語教育』11, 103-114, 国際交流基金.
- 吉橋健治・傅亮・仁科喜久子 (2007) 「学習者に合わせた例文表示ツール」*CASTEL-J in Hawaii 2007 Proceedings*, 223-226.
- Brown, A. L., and Day, J. D. (1983). Macrorules for summarizing texts: The development of expertise. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 22, 1-14.
- Sato, S., Matsuyoshi, S. and Kondoh, Y. (2008). Automatic assessment of Japanese text readability based on a textbook corpus. *LREC-08*.